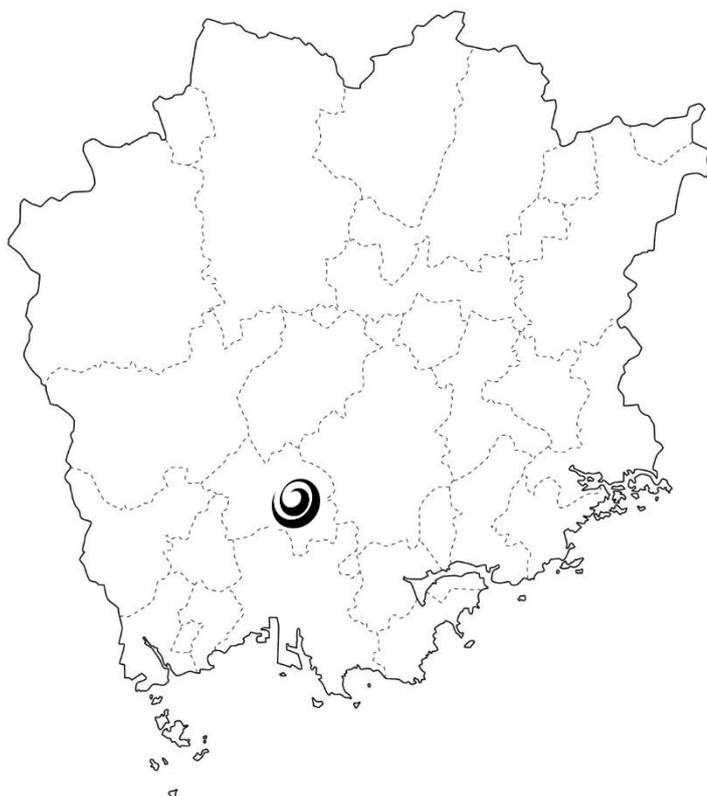


大学評価ワークショップ 平成 27 年度試行実施

平成 27 年度 第 2 回 大学評価ワークショップ(岡山県立大学) 実施報告書



平成 28 年 4 月 6 日

一般社団法人公立大学協会

公立大学政策・評価研究センター

大学評価ワークショップの試行実施について

公立大学政策・評価研究センター長 浅田尚紀

公立大学政策・評価研究センター（以下、「センター」）は、一般社団法人公立大学協会が平成24年度に設置した「公立大学の質保証に関する特別委員会」の活動を発展強化し、公立大学に関する政策・評価の課題についての調査・検討及び関連する諸事業を実施することを目的として、平成25年度に設立されました。

当面は3年程度をかけて試行的な事業を行うこととし、その一つとして、年間2大学程度を対象に「大学評価ワークショップ」を実施し、外部評価としての「大学ピアレビュー」のモデルの作成と検討に取り組むことと致しました。

平成16年度から開始されたわが国における大学の評価制度において、公立大学は、大学機関別認証評価（以下、「認証評価」）に関しては3つの認証評価機関に選択が分かれ、公立大学法人評価（以下、「法人評価」）に関しては評価委員会が設立団体毎に分かれているため、公立大学評価の知見や経験が分散し、公立大学の評価の在り方について包括的に検討されたことはありませんでした。そこでセンターでは、公立大学の評価に関して公立大学自身の主体的取組みによる経験の蓄積を行いながら、認証評価や法人評価の在り方についても検討を重ね、公立大学の質保証を実質化することを目的として「大学評価ワークショップ」の試行を開始しました。

平成25年度は長崎県立大学と名城大学、平成26年度は岩手県立大学、平成27年度は山形県立保健医療大学と岡山県立大学で実施しました。

以下に大学評価ワークショップの目的等を示します。

大学評価ワークショップ〈概要〉

1 目的

センターでは、大学評価ワークショップを、公立大学協会会員校の実施要請に応じ、以下のことを目的とした外部者による評価として行います。

- ① 大学が評価されることを要望する項目を重点的に評価し、その結果を大学ピアレビューとして提供することによって、当該大学の教育研究活動等の改善と伸長に役立てること。
- ② 大学の内部質保証の取組みや認証評価・法人評価の受審経験についての意見交換を通じて、当該大学及び公立大学全体の質保証の在り方について考察を深めること。

2 特徴

「大学評価ワークショップ」の特徴を以下に4点示します。

- ① 実施する大学を訪問の上、大学人による対等な対話を通じて評価を行います。評価チームは、公立大学の学長や幹部教職員等の経験者を中心に構成し、公立大学の運営経験に基づいた対話を行います。評価チームの主査は、当該の「大学評価ワークショップ」ごとに、センターのメンバーの中から選定します。
- ② 評価項目は網羅的・定型的なものではなく、大学が要望する項目について評価を行います。
- ③ 「大学評価ワークショップ」を実施する大学がすでに公表済みの教育情報や認証評価・法人評価結果を事前に参照することにより、大学の「大学評価ワークショップ」実施に対する負担を軽減します。
- ④ 大学による意見表明の機会を十分に設定し、当該の「大学評価ワークショップ」や既存の評価制度及び大学の内部質保証に関する反省的考察をプログラムの中に組み込んでいます。

3 外部評価結果

大学評価ワークショップ終了後、大学が評価を要望した項目に関しての外部評価結果として大学ピアレビューを提供します。大学ピアレビューには、大学の説明をセンターとして要約した概要を示した上で提言を行います。

この「大学ピアレビュー」は、大学がその内容を自らの改善活動に活用すると同時に、これから受審する認証評価における自己評価書や法人評価における業務実績報告書の中に盛り込むなど、外部評価を受けたエビデンスとして援用されることを想定しています。

目 次

I	大学評価ワークショップ（岡山県立大学）の実施概要	1
1	はじめに	
2	ワークショップの概要	
3	大学の特色ある取組み	
4	内部質保証システム	
5	大学評価ワークショップの振り返り	
II	大学ピアレビュー（岡山県立大学）	4
i	項目ごとの評価	5
1	大学の特色ある取組みに対する評価項目（岡山県立大学がディスカッションを要望した項目）	
(1)	大学による取組み	
①	大学教育開発センター FD 研修事業	
②	岡山県立大学教育力向上支援事業	
③	COC+「地域で学び地域で未来を拓く‘生き生きおかやま’人材育成事業」計画	
(2)	学生による取組み	
①	アデレード・スタディツアー	
②	総社市インターンシップ	
③	AMDA 東日本大震災復興支援ボランティア	
④	チュッピー広場	
2	内部質保証システムについて	
ii	受審大学所感	14
iii	評価チーム総括	15
III	大学評価ワークショップ（岡山県立大学）実施仕様書	16
IV	大学評価ワークショップ（岡山県立大学）実施の経緯	22

※このほか、ワークショップ当日に使用された「大学評価ワークショップ（岡山県立大学）実施ハンドブック」が公立大学政策・評価研究センターのブログ(<http://kodaikyo.sb1o.jp/>)に公開されている。

I 大学評価ワークショップ（岡山県立大学）の実施概要

1 はじめに

平成 28 年 2 月 7 日（日）と 8 日（月）の両日にわたり、岡山県立大学において平成 27 年度第 2 回となる「大学評価ワークショップ（岡山県立大学）」（以下、「ワークショップ」）を実施した。今回の評価チームは、公立大学政策・評価研究センター（以下、「センター」）の浅田尚紀センター長（兵庫県立大学副学長）、佐々木民夫副センター長（岩手県立大学特任教授兼高等教育推進センター長）、公立大学協会の奥野武俊顧問（前大阪府立大学長）、公立大学協会の中田晃事務局長、また本センターの「連携研究員」から、滋賀県立大学の廣川能嗣理事・副学長、県立広島大学の藤井保学長補佐を加えた 5 名で構成した。また、オブザーバーとして文部科学省から君塚剛大学振興課課長補佐が、全プログラムに参加した。

2 ワークショップの概要

岡山県立大学からは、辻英明理事長兼学長（以下、学長とする）をはじめ、理事、学部長、学科長のほか、評価委員を含む 42 名の教職員が出席した。また、学生の傍聴も可能とされた。なお、2 日目にはオブザーバーとして岡山県総務部総務学事課から真鍋紳一郎参事が参加した。

1 日目は、冒頭に、辻学長、浅田センター長の挨拶があった。辻学長からは、平成 28 年度に予定している認証評価受審に先立ち、本ワークショップを外部評価として受けることで、現在進めている自己点検・評価を深めていきたいことなどが説明された。浅田センター長からは、本ワークショップは、法人評価や認証評価のような法令で定められた大学評価とは異なり、大学とセンターがオープンな場で双方向の対話を行うことにより、大学の特色と課題を明らかにし、大学の実質的な改革に繋げていく取組みであること、また、センターではワークショップを通じて大学の質保証の在り方について検討を試みていることなどが説明された。続いて、センター側、大学側双方の出席者の紹介を行い、その後、2 日目のプログラムの中で行うディスカッションの事前準備として岡山県立大学の概要及び学内の内部質保証システムについて、辻学長、吉原理事からそれぞれ説明を受けた。以下に辻学長から説明のあった大学概要の主な内容を示す。なお、吉原理事からの説明については、文章の構成の都合により P2 の「4 内部質保証システム」に示す。

岡山県立大学は、昭和 30 年に開学した岡山県立栄養短期大学を母体として、昭和 36 年に岡山県立短期大学に改称されたのち、「人間尊重と福祉の増進」を建学の理念とし、平成 5 年に保健福祉学部、情報工学部、デザイン学部の 3 学部をもつ大学として開学した。平成 19 年には公立大学法人のもとに設置されることとなった。

学生数は 1,638 名（学部生）、教員数は 163 名、職員数は 39 名（いずれも平成 27 年 5 月現在）である。平成 27 年度入学者選抜の志願倍率は 7.8 倍であり、就職率は 97.8%（平成 26 年度）である。国家試験合格率は例年全国平均に比べて高く、例えば看護師は 97.7%、保健師は 100%（いずれも平成 26 年度実績）である。

2日目は、おおむねこれまでに実施したワークショップを踏襲し、大学の特色ある取組みについてのプレゼンテーション及びディスカッション、同大学が取り組む内部質保証システムについてのディスカッション、ワークショップ自体を振り返るための意見交換を行った。

3 大学の特色ある取組み

2日目午前中に行われた大学のプレゼンテーションの内容は以下の4項目である。(1) 田内雅規大学教育開発センター長による「大学教育開発センターFD研修事業」の紹介、(2) 吉原直彦学生部長、山下広美キャリア形成支援部会長、高橋吉孝アドミッション部会長、中村光保健福祉学部教授による「岡山県立大学教育力向上支援事業」の紹介、(3) 渡辺富夫地域共同研究機構長による「COC+「地域で学び地域で未来を拓く‘生き生きおかやま’人材育成事業」計画」の紹介、(4) 4組の学生グループ（アデレイド・スタディツアー、総社市インターンシップ、AMDA 東日本大震災復興支援ボランティア、チュッピー広場）からの学生生活動の紹介である。(4)についてはプレゼンテーションの後に学生との意見交換を行った。

昼食後、チュッピー広場、語学教育推進室、附属図書館などを見学し、説明を受けた。

午後には、午前中にプレゼンテーションのあった3項目（上記(1)～(3)）について、それぞれの特色を踏まえた上で、関連して大学が抱える課題について深く掘り下げながら意見交換を行った。

大学教育開発センターFD研修事業については、プレゼンテーションでは、これまで委員会形式により企画・実施されてきたFD活動の取組状況、センター設置の経緯と構成、現在のFD研修事業の目的と概要等について説明があり、ディスカッションでは、企画を担う大学教育開発センターの6部会（アドミッション部会、共通教育部会、FD部会、教育評価部会、キャリア形成支援部会、学生支援部会）と教育企画室の役割や、教育改善のPDCAサイクルの構築等について意見交換を行った。

教育力向上支援事業については、プレゼンテーションでは、現在実施されている事業の中から3事業が選ばれ、それぞれ目的や実施状況について説明があり、ディスカッションでは、事業へ職員が参画することの有効性、事業を継続・発展させる際の課題、各事業の成果に対する外部評価の導入等について意見交換を行った。

平成27年度に公募された文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の選定事業である「地域で学び地域で未来を拓く‘生き生きおかやま’人材育成事業」については、プレゼンテーションでは、事業の目的、概要、域学連携活動に関する準備状況について説明があり、ディスカッションでは、地元定着率の向上の課題や地元企業との連携、全学的なプログラムの整備の必要性について意見交換を行った。

4 内部質保証システム

続いて、センター側から提示したテーマである内部質保証システムについてディスカッションを行った。内部質保証システムの概要について、1日目に吉原理事から説明があった内容のうち、主なものを以下に示す。

平成26年度以前は、それぞれの学科の代表者により構成される、6つの専門委員会（入

試実施専門委員会、教務専門委員会、学生生活支援専門委員会、就職支援専門委員会、図書館専門委員会、広報専門委員会）が内容に応じて役割分担して課題について協議した後、学長が委員長を務め各学部長が参加する常任委員会（入試委員会、教育研究活動委員会、学生生活委員会、評価委員会等）が意思決定する仕組みであった。この仕組みは、専門委員会と常任委員会の役割の差異が曖昧、評価委員会に様々な課題が集中する、大学教育や評価の最新の動向を踏まえた抜本的改革が行いにくい、等の課題があった。

そこで、平成 27 年度に組織を再編し、専門委員会は 3 つ（入試実施、教務、図書館）に絞り、その他の教育改善に関する戦略的な企画機能を、新設した大学教育開発センターに集約した。自己点検・評価に関しては、各学部設置されている評価分科会で行われた自己点検・評価を評価委員会がとりまとめる体制とし、その結果をもとに業務実績報告書を毎年度作成し、岡山県地方独立行政法人評価委員会の評価を受けている。なお、これらの資料はすべて大学ホームページで公表している。

続いて行った意見交換では、組織図の表現、組織単位での PDCA サイクルの在り方、また平成 28 年度に控える認証評価に関して、前回受審時に指摘された事項についての自己点検・評価のあり方、認証評価と法人評価に関する業務実績等のデータベース化と活用等について意見交換を行った。

5 大学評価ワークショップの振り返り

最後にワークショップそのものに対する評価とその改善に向けた意見交換が行われた。

大学側から、「大学の抱える課題が他の大学にも共通する課題なのか、本学だけの課題なのかを理解できたように思う」「大学の課題を客観的に捉えることができた」などの感想が述べられた。

ワークショップ自身について改めて意見交換を行ったことで、大学側はワークショップの意義とその活用方法について、センター側はワークショップの実施方法等に関し、今後検討すべき点について考察を行うことができた。

最後に、辻学長、浅田センター長からそれぞれ締めくくりの挨拶があり、ワークショップを閉会した。

Ⅱ 大学ピアレビュー（岡山県立大学）

28 公大協第 4 号
平成 28 年 4 月 6 日

岡山県立大学
学長 辻 英明 様

一般社団法人 公立大学協会
公立大学政策・評価研究センター
センター長 浅田 尚紀

大学ピアレビュー（岡山県立大学）の送付について

平素は本センターの活動にご支援を賜り、誠にありがとうございます。

去る平成 28 年 2 月 7 日及び 8 日、公立大学政策・評価研究センターが派遣した評価チームが、岡山県立大学（以下、大学とする）を訪問し「大学評価ワークショップ」（以下、ワークショップ）を実施いたしました。

ワークショップでは、大学が評価を要望する項目に関し、大学からのプレゼンテーションを踏まえ、大学と評価チームとの間でディスカッションを行いました。これらに基づき、本センターは、それぞれの項目についての「概要」と「提言」を「大学ピアレビュー」としてまとめましたので、お送りいたします。

（事務取扱）

〒105-0001

港区虎ノ門 2-9-8 郵政福祉虎ノ門第二ビル 2 階
一般社団法人公立大学協会 事務局（担当：杉浦）

TEL 03-3501-3336 FAX 03-3501-3337

E-mail jimu@kodaikyo.jp

大学ピアレビュー（岡山県立大学）

i 項目ごとの評価

1 大学の特色ある取組みに対する評価項目

（1）大学による取組み

①大学教育開発センターFD 研修事業

概要

岡山県立大学の FD 活動は、平成 15 年度からの授業評価アンケート、平成 19 年度からの相互授業参観、平成 20 年度からの FD 講演会を三本柱として実施してきたが、FD の企画実施の迅速性、教職協働の推進、FD に関し PDCA サイクルを機能させるための体制の整備、教職員の教育改善の専門性向上などが課題であった。

これらの課題を解決するために、より幅広い視点で教育改善についての調査研究・企画立案を行う組織として、平成 26 年 10 月に大学教育開発センターを設置した。大学教育開発センター内に設けた教育企画室及び 6 つの部会（アドミッション部会、共通教育部会、FD 部会、教育評価部会、キャリア形成支援部会、学生支援部会）が分担して、FD 研修事業の企画実施をしている。

大学教育開発センター設置以降の FD 研修事業は、主として全学研修会、教育開発講座、センターワークショップの 3 形態で構成している。

全学研修会は、教職員の全員参加を原則として学生や学外者にも呼びかけて実施している。学内外の講師による講演や他大学の事例紹介などにより、教職協働やキャリア形成支援等について理解を深める内容で、これまでに 3 回実施し、いずれの回も 120 名を超える教職員が参加している。

教育開発講座は、6 つの部会が各部会の所掌事項に応じたテーマで学内外の講師による講演を主な内容としており、大学教育開発センター教職員を中心に、全学の教職員、学生や学外者にも参加を呼びかけて、これまでに 6 回実施している。

センターワークショップは、各部会が事業に取り組む中で見出した課題を共有し専門性を高める目的で、大学教育開発センター教職員を中心に、全学教職員に参加を呼びかけて実施している。これまでの実施では、入学者選抜、アクティブ・ラーニング、グローバル人材育成をテーマとして、外部協議会への参加報告、各学部の取組み事例報告、討論会等を行うことが主な内容であった。

各部会は、教員と職員で構成しており、教職協働での運営を原則としている。FD 研修事業にも、教員だけでなく SD 研修事業として職員も参加している。

提言（評価者の意見）

- FD 研修事業への教職員の参加者数が総じて多い（例えば第 1 回全学研修会は 153 名が参加）ことは、教育改善や学生支援に対する教員及び職員の意識が高いことの表れであ

り、高く評価できる。

- 大学教育開発センターを設置し、その中に6つの部会を設けたことにより、FD 研修事業を機動的かつ専門性を持って企画・実施するための体制が整備されたことは大きな前進である。今後は、FD 研修事業の効果を評価する仕組みを適切に構築し、教育改善のPDCA サイクルを機能させていくことが期待される。教育改善の成果は最終的には学生の実感に表れるものであり、学生が教育改善を実感できるようになることを期待したい。
- 教育改善に関する企画立案への職員の参画は、大学が組織的に教職協働を推進する取り組みとして高く評価できる。
- 教職協働の推進にあたっては、職員の専門性の向上が重要であり、職員の学びを支援する仕組みを充実させることが望ましい。
- FD に学生を参加させることは、学生への授業評価アンケートでは得られない声を直接聞くことができ、同時に学生と教員との距離を縮めることにもつながるため、FD 活動の活性化に有効である。学生のFD 参加には工夫が必要になるが、学科単位等での実施であれば、学生も比較的参加しやすい。

②岡山県立大学教育力向上支援事業

概要

岡山県立大学は、平成 21 年度、教育の充実・質の向上及び教員の教育力の向上に直接結びつく調査並びに実践活動に対し補助金を交付する、教育力向上支援事業を創設した。

この事業は、大学全体及び学部・学科等の人材養成の目的及び、学生に身に付けさせるべき学習成果を明確にした上で、教育活動の成果を上げることにより、基本的な資質を身に付けた人材を輩出し、もって、大学が社会の信頼に応えることを目的としている。

交付対象としては、以下の 4 点が示されている。

共通（教養）教育の改革推進に関するもの

学部教育及び大学院教育の改革推進に関するもの

高大接続、入学者選抜方法の改善及びキャリア形成支援に関するもの

教員の教育力向上・開発に関するもの

創設以来 7 年間で計 105 件の事業が採択されており、平成 27 年度においては、21 件、計 940 万円の採択実績となっている。審査においては、全学的で波及効果の高い取組みに対し重点配分することとしている。審査結果は、審査における評価の理由及び、次年度以降再計画する場合の留意点等を添えて、申請者に対して通知される。

各事業は、事業実施のために編成される教員のチームにより行われる。採択された事業の申請者に対しては、毎年発行される教育年報において、事業概要及び事業の自己評価等を記述することを義務付けている。

提言（評価者の意見）

- 本事業に毎年度多数の応募があることは、教育改善に関する教員の意識の高さを表すものであり、高く評価できる。
- 事業がもたらす直接の効果はもちろんのこと、副次的効果として、学内に教育改善のためのチームが多数構築され、教員に潜在していた改革意欲を表に引き出すことにつながっていることは、高く評価できる。
- 実施した事業のうち、大学として恒常的に取り組む価値のあるものについては、継続し発展させることにより、大学の教育力のさらなる向上を図っていくことが期待される。
- 本事業に職員も応募、あるいは参画できるようにすることも有効である。職員は教員とは異なる視点での動きができるメリットがあることに加え、参画した職員の姿勢が事務局全体の意識向上に波及することも期待できる。また事業への参画を職員の業績として評価すれば、さらに職員の意欲も高まることが期待できる。
- 各事業の成果について外部評価を導入することで、事業内容の充実を図ると同時に、取組みの意義を学内で共有し、さらに深めていくことが期待される。

③COC+「地域で学び地域で未来を拓く‘生き生きおかやま’人材育成事業」計画

概要

岡山県立大学は、平成 27 年度文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に「地域で学び地域で未来を拓く‘生き生きおかやま’人材育成事業」で代表校として申請して選定された。連携校は、岡山大学、岡山理科大学、吉備国際大学、倉敷芸術科学大学、くらしき作陽大学、山陽学園大学、就実大学、ノートルダム清心女子大学、の 8 大学である。

この事業は、岡山県の「晴れの国おかやま生き生きプラン」（平成 26 年度から 3 年間）及び「おかやま創生総合戦略素案」（平成 27 年度 6 月）に即しており、事業協働自治体（備前市、岡山市、総社市、笠岡市、高梁市、倉敷市、真庭市）を中心とする県内自治体、大学、企業、経済団体等が協働し、地域の課題解決と振興を図ることを目的としている。

本事業では、地域を志向する教育プログラムとして、副専攻の「岡山創生学」科目群を新設した。この科目群には、低年次に「おかやま」の魅力と課題を学ぶ地域志向基礎科目、高年次に地元就職を意識させる地域志向実践科目が配置されており、全学必修科目の「おかやまボランティア論」「おかやまを学ぶ」を含む計 12 科目で構成されている。高年次の科目では、事業協働地域への卒業生の定着を狙い、平成 29 年度から導入予定の「クォーター制」を活用した 1 ヶ月以上の長期インターンシップが計画されており、その具体的な設計について現在受入先企業と連携して検討を行っている。

「岡山創生学」科目群の受講者の評価には、自治体、NPO 団体の地域実践者からの視点を取り込んで作成したルーブリックを活用する。指定の要件を満たす 10 単位を修了した学生には、「地域創生推進士」の称号を付与する。

キャリア教育に関しては、長期インターンシップと連動して地域の産業界と連携し地域に根差す人材を育成するため、県内企業の実態・特徴を集めた、県内雇用先のリストとなる「企業ポートレート」と、学生のキャリアに関する詳細なデータベースである「学生ポートフォリオ」のマッチングを的確に行うためのシステムを構築する。また、「学生ポートフォリオ」は、学生一人ひとりの学習過程を教員が把握して指導できるようにするためにも活用する。

産学連携の推進については、地域産業界のニーズに対し、デジタルエンジニアリング、商品・観光デザイン、ヘルスケア等の分野について、共同研究や技術指導等の一層の活発化により地場産業の活性化を図ると同時に、雇用創出の実現を目指している。

施設面の整備については、教育改善、域学連携、産学連携の拠点施設として、4 連携自治体（総社市、笠岡市、備前市、真庭市）と大学が協働して、「地域創生コモンズ」を自治体ごとに 1 ヶ所ずつ、計 4 ヶ所設置する。コモンズでは、「地域協働演習」等の「岡山創生学」科目群の授業のほか、地域振興ワークショップの開催など、地域住民との対話の場としての活用を予定している。コモンズの活用は、平成 28 年度から開始予定で、ハードは自治体が整備し、運営は自治体と地域の NPO 団体等が協力して担う。

提言（評価者の意見）

- 文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に、代表校として申請プログラムが選定されたことは、これまで行ってきた地域貢献の成果が実ったものとして高く評価できる。
- 県内の自治体や、県内の他大学との連携プログラムについても、すでに様々な成果を上げており、高く評価できる。今後これらの取組みを拡大していくことにより、大学の地域貢献度が高まることが期待できる。
- すでに非常に高い地元定着率を実現していることは高く評価できる。今後事業に取り組むにあたっては、単に地元定着率の上昇を目指すのではなく、教育としての意義を含めた事業全体の趣旨にふさわしい説明ができるようにすることが望ましい。
- 地域志向の高い学生を育てるために考えられている新設科目や副専攻プログラムなどが全学的に行われることにより、教育改善が進み、学内の教職員や学生の地域志向に対する意識改革が進むものと期待される。
- 地域創生推進士の認定について、学生のキャリア形成につなげることを期待する場合は、学生にとって魅力のあるものとなるように認定の意味づけをすることが必要である。
- 学部横断的に行う地域に関する全学共通科目では、そこで専門の異なる学生同士が議論できるようにすると、学生同士の相互刺激により、教育効果が高まることが期待できる。
- 長期インターンシップの実現のためには、受入先の確保や学生の研修（業務）内容などに関し、受入先の企業等と丁寧に協議することが必要である。企業との連携を深め活動を拡大していくために、実際に地元企業等との調整を担う、地域連携コーディネーターの活躍が期待される。
- インターンシップにおける学生の満足度を高めるためには、インターンシップの受入先企業から、その企業の魅力ある将来ビジョンが示されることが有効である。特に、大学院の学生にとっては、専門性を高めるだけでなく自身の将来についてビジョンを持つことにつながることを期待できるため、より効果的と考えられる。
- 取組みの成果を可視化するためには、積極的な協力が得られる企業等に連携のターゲットを定め、モデルとなる“成功事例”を作り、それを大学内のみならず受入先も含めた地域と共有することが効果的である。

（２）学生による取組み

概要

4つの学生グループ（①アデレード・スタディツアー、②総社市インターンシップ、③AMDA 東日本大震災復興支援ボランティア、④チュッピー広場における地域貢献活動）がそれぞれのテーマでプレゼンテーションを行った。

① アデレード・スタディツアー（異文化圏における専門分野の学び）

オーストラリア・アデレードを学生が訪問して行うアデレード・スタディツアーは、専門分野に関連した研修体験を通じて、異文化理解や多文化共生の重要性について理解を深めることを目的として行っている。

平成26年度の研修は、2月27日～3月9日のスケジュールで、南オーストラリア州立の職業教育・訓練機関であるTAFE SAでの専門分野及び語学に関する研修及び、地元の小学校、高校を訪問する内容で実施した。

TAFE SAの研修では、南オーストラリア州における保健福祉制度や在宅介護を支援するシステムや、移民文化に配慮した高齢者福祉施設の見学を通じて、個人の尊厳を重視した福祉のあり方などを学び、小学校・高校の訪問では、食育活動や日本文化の紹介を行うなど、生徒との交流を行った。また、スタディツアーに参加した学生は、帰国後に同級生や次年度に参加を予定している学生とともに地元小学校での食育活動を実施した。

② 総社市インターンシップ（地域の学びと提言活動）

岡山県立大学は、学生に自らの専攻に関連した就業体験の機会を提供し、各自のキャリア形成を支援するためにインターンシップを実施している。その中で、総社市インターンシップは、市との連携協定に基づき平成21年度に開始したものである。当初は市役所業務の見学・体験を内容としていたが、平成23年度からは、学生からの行政に向けた具体的な「政策提言」を行う取組みも行っている。この提言のうち優秀とされた4件は、実際に市の施策に活かされた実績がある。

③ AMDA 東日本大震災復興支援ボランティア（福祉の心の学び1）

岡山県立大学では、AMDA（相互扶助の精神に基づき、災害や紛争発生時、医療・保健衛生分野を中心に緊急人道支援活動を展開する特定非営利活動法人。本部が岡山県にある。）との連携交流協定を締結しており、平成25年度から毎年、大学コンソーシアム岡山の加盟校とともに東日本大震災支援ボランティア活動に学生が参加している。さらに平成27年度は、本学独自に9月12日～16日のスケジュールで13名の学生が参加し、畑作業、美化活動、キャリア研修、市内視察などのボランティア活動を行った。

④ チュッピー広場（福祉の心の学び2 地域の乳幼児及びその保護者との交流活動）

岡山県立大学の保健福祉推進センターが企画・主催する、「県大そうじゃ子育てカレッジ」の一つとして実施されている取組みであり、学生と地域の乳幼児及びその保護者が、大学内に設けた専用スペースを利用して、さまざまな企画を通じて交流する事業で、毎週1回

のペースで実施されている。保健福祉学科子ども学専攻のほぼ全ての学生が参加しており、平成 26 年度は 59 日の開催で、615 組の乳幼児及びその保護者の参加があった。

評価チームコメント

これまでの大学評価ワークショップにおいても学生によるプレゼンテーションが行われてきたが、今回の発表は、それぞれの団体の性格がかなり異なっており、大学全体としての評価項目の一つにするのは難しいことから、今後の企画・運営に参考としていただく視点での評価チームのコメントを、以下に掲載する。

（学生による取組全般について）

- 学生によるプレゼンテーションは、短時間の発表にも関わらずよくまとめられており、高く評価できる。学生達の努力に敬意を表する。
- このような学生の活動を、学内教職員に伝える良い機会になったように思う。
- 今回のプレゼンテーションのために参加した学生が、大学のプレゼンテーションの時間にも参加し、ワークショップの議論を傍聴してくれたことを評価する。
- 発表は、学生による自主的な活動がベースになっているが、今後これらを大学のプログラムとして教育プログラムに発展させることや、地域貢献プログラム（例えば COC+事業）の中に取り込むなどの工夫が必要と思われる。

①アデレイド・スタディツアー）

- 単に見学するだけでなく、学内の国際交流センター等での事前準備や、アデレイドの小学校・高校での授業の実施、その経験を活かした帰国後の企画などの活動が組み込まれていることで、取組みがより有意義なものとなっている。事前・事後学習を整備し、語学教育も取り入れられれば、この取組みは単位化できる可能性がある。大学の教育プログラムとして発展することを期待する。

②総社市インターンシップ）

- プログラムの中で取組む学生の政策提案が、現実に行政に活かされると、学生の参加意欲が一層高まるものと思われる。
- 参加する学生数を増やすために、他の自治体にも働きかけるなどにより機会を増やし、岡山県立大学の特色を活かした長期インターンシップにすることを期待する。
- 全学での単位化を検討中とのことであり、その成果に期待したい。

③AMDA 東日本大震災復興支援ボランティア）

- 学生の自主的な活動であるが、この種のボランティア活動への大学による支援の充実は重要である。
- 他大学の地域活動や防災の取組みにも目を向けるなどの工夫を取り入れた地域活動にすることで、COC+事業にも組み入れられる可能性はある。

（④チュッピー広場 地域の乳幼児及びその保護者との交流活動）

- 学生にとっては、子どもの発達に触れられるだけでなく保護者とも交流できる場として、学びの実践のための貴重な機会となっており、有意義である。
- 教育上有意義であることに加え、地域と密接につながる活動ともなっているため、COC+事業に取り込むことや、活動の単位化についても検討が行われることを期待する。

2 内部質保証システムについて

概要

岡山県立大学の組織体制は、平成 26 年度以前は、それぞれ学科の代表者により構成される、6 つの専門委員会（入試実施専門委員会、教務専門委員会、学生生活支援専門委員会、就職支援専門委員会、図書館専門委員会、広報専門委員会）が、課題の内容に応じて役割分担して協議した後、学長が委員長を務め各学部長が参加する常任委員会（入試委員会、教育研究活動委員会、学生生活委員会、評価委員会等）が意思決定する仕組みであった。この仕組みは、専門委員会と常任委員会の役割の差異が曖昧、評価委員会に様々な課題が集中する、大学教育や評価の動向を踏まえた抜本的改革が行いにくい、等の課題があった。

そこで、平成 27 年度に組織を再編し、全学の専門委員会は業務の実施面の計画を 3 つの専門委員会（入試実施、教務、図書館）に絞り、その他の教育改善に関する戦略的な企画機能を、新設した大学教育開発センターに集約した。これに伴い、評価委員会は、FD 等の事業のプランニング機能を外し、取組みのチェック機能に特化することとなった。ただし、組織改編が平成 27 年度からスタートしたものである関係上、学内のあらゆる取組みの自己点検や、その法人評価との接続等は、今後の検討課題となっている。

自己点検・評価に関しては、各学部設置されている評価分科会で行われた自己点検・評価を、評価委員会がとりまとめて作成する体制となっている。その自己点検・評価の結果をもとに、業務実績報告書を毎年度作成し、岡山県地方独立行政法人評価委員会の評価を受けている。なお、これらの資料はすべて大学ホームページで公表している。

自己点検・評価活動の結果は、毎年発行している「教育年報」、「社会貢献年報」にもまとめている。これらの年報は、全教職員に配付するほか、大学のホームページにおいて、教員個人の教育研究活動状況を掲載した「教育研究者総覧」等とあわせて公表している。

提言（評価者の意見）

- 大学教育開発センターの新たな設置に関しては、教育研究に関する Plan、Do の機能が一元化され、戦略的な組織体制が整備されたものとして高く評価できる。
- 大学教育開発センターの設置により、教育面の組織体制については充実が図られたが、財務などを含めた法人経営全体としての改善を図るための組織体制についても、今後整備が求められる。
- 組織体制を説明する組織図において、法人の組織と大学の組織が混在し、両者の区別が明らかでないことについては、整理しておくことが求められる。関連して、理事長・学長一体型法人であっても、理事長の役割と学長の役割を明確にすることが必要である。
- 組織体制が複雑化し、組織体制全体の構造の把握が難しくなっている。業務実施のための機能の分担、指揮命令系統を示す組織図と PDCA サイクルの流れを一つの図で表現することには無理があるため、表現上の工夫が求められる。
- 企画立案に際し、IR 活動で得た客観的数値情報を活用することは重要である。平成 28 年度から導入、平成 29 年度から本格運用される全学情報システムの有効活用が期待される。

ii 受審大学所感

この度は平成 27 年度第 2 回「大学評価ワークショップ」にて、多くの貴重なご意見やご提言を頂戴し、誠に有り難く感謝申し上げます。公立大学における教育改善や評価に深く関わってこられた先生方から頂きました丁寧かつ示唆に富んだご助言の数々は、本学にて進めて参りました教育改善の取組みをより一層強化する上で大いに役立つものであります。

受審後、本学評価委員会にて振り返りを実施いたしました。頂きましたご意見やご提言につきまして、今後必要となる対応策についても協議し、認証評価の根拠資料や平成 28 年度計画等に反映することといたしました。具体的には、1)内部質保証体制を学内外にて理解可能なものとするため、法人及び大学組織の意思決定に係る階層構造や役割を区別し易くする運営体制図（関係図）を作成すること。2)FD 活動等において学生主導型プログラムの導入を計画すること。3)海外スタディツアー等の学生が自主参加するプログラムについて単位化を計画すること。4)教育力向上支援事業などの教育に係る取組を研究対象とし、公表の上、外部評価を受けるなどの工夫を検討すること。5)事務職員における教職協働等による大学教育参画意欲につながる取組を工夫すること。以上をふまえて、学内の共通理解をより一層深め、一步ずつ成功事例を積み上げて参ります。

さて、本学が評価を依頼しました、3つの特色ある大学の取組み、ならびに4つの学生の取組みに対しては大変高い評価を頂くとともに、それらを更に発展させるための具体的なご提言を頂きました。発表教員にワークショップ後に感想等を求めたところ、「教育改革の方向性や取組みについて高い評価を頂き励みになった」、「取組みの意義や価値について再認識する機会となった」、「学生による企画を増やしたい」、また学生からは「プレゼンテーションの内容や進め方に高い評価を頂き今後の励みになった」、「取組んだことが認められ今後のキャリアにも生かすことができそうでうれしかった」、指導教員からは「学生の成長している姿を目の当たりにして、嬉しくまた頼もしく感じた」、「ボランティア活動支援の励みとなった」等々、評価委員の方々への感謝とともに感想が寄せられました。

ワークショップ参加者からは、「本学の取組みについて外部の視点からどの様に見えるかを客観視する良い機会となった」、「本学の改革が急ピッチで進んでいることの意義について改めて理解する機会となった」といった意見や感想が寄せられました。

以上の感想等から本学構成員にとって、本ワークショップが大学の現状や教育のトレンドを知り、本学教育のあるべき姿を考える、よき FD 研修となったのではないかと考えます。

本学は平成 28 年度に、COC+における教育改革、域学連携及び産学連携による活動を本格化させ、公立大学として真の地（知）の拠点となるべく大きな一步を踏み出します。また同年度に、大学評価・学位授与機構による認証評価を受審いたします。COC+等による教育改善の活動に精力的に取り組む一方、学修成果や教育に関する研究成果の点検ならびに内部質保証機能の点検など、平成 27 年度に組織再編して以降の PDCA 活動における取組みが途半ばであるため、これらの活動を精力的に進める必要があります。その際、頂きましたご意見やご提言を留意事項として活用させて頂くとともに、本ワークショップのハンドブック、実施報告書ならびにピアレビューを、外部評価の資料として活用させて頂く所存ですので、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

iii 評価チーム総括

岡山県立大学における大学評価ワークショップについての、評価チーム側の振り返りとして、いくつかの点を以下に総括する。

本センターにおいて、大学評価をこのようなワークショップ形式で行っている趣旨の一つは、ピアレビューを行う評価者と受ける立場の大学との対話を重視することにより、受審大学内における議論を活性化し、結果として改善・改革が促進されることである。今回のワークショップ終了直後に、ワークショップを踏まえた率直な振り返りが行われていることは、この趣旨に沿った取組みが行われていることであると考えられる。

今回のワークショップでは、主に以下の点が議論となった。

- ・ 岡山県立大学が、平成 26 年度に大学教育開発センターを設置して全学の教育改善に関する企画機能を集約してきたことは、戦略的な組織体制を構築する上で大きな前進であり、教育改善のみならず大学運営における今後の成果に期待されるものであったこと。
- ・ 学内 FD 研修事業に対する参加者数が非常に多く、教育力向上支援事業についても事業への応募件数が多いことなどは、教育改善や学生支援に対する教職員の意識の高さの表れであり、大学が取り組んできた成果の一つになっていること。
- ・ これまで着実に地域貢献に関する独自のプログラムを実施してきたことが、「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の代表校として採択され、今後、プログラムの参加大学や自治体との連携をさらに深めて、地域連携に関するモデルを提示できるような努力を行っていること。
- ・ 組織体制の説明においては、法人の組織と大学の組織の区別を出来る限り整理しておくことが必要であること。

これらの議論に関し、学内における振り返りでは、今後の取り組むべき課題を整理して、そのための活動を開始している。このことは、“評価”が、単なるチェック機能だけでなく、それを自らの改善・改革を考えるきっかけにして、学内における議論を活性化するために、有効に用いられるものであることを表しており、学内 FD 研修としても受け止められたことも確認しておきたい。

また、プレゼンテーションを担当した学生が、大学の取組みに関するプレゼンテーションに同席したのは初めてのことであり、大学の改善の努力を学生と共有できる貴重な機会となった。さらに、前回に引き続き、他大学からの協力ボランティア（連携研究員）が評価者として加わる実績も積むことができた。

センターの今後の課題としては、持続的に受審大学をフォローアップする方法について検討していくことが求められる。また、センターが保有している客観的なデータを用いた分析結果を示すことや、センター側の問題意識のプレゼンテーション等、ワークショップがより有意義なものとなるための工夫も同様に検討が求められる。さらに、大学がこうした支援を受けやすくするための、受審大学側の負担の軽減についても工夫が必要となろう。

Ⅲ 大学評価ワークショップ（岡山県立大学）実施仕様書

I. 評価・支援項目

1 大学の特色ある取組みに関する評価項目

(1) 大学による取組み

- ①大学教育開発センター FD 研修事業について
- ②岡山県立大学教育力向上支援事業について
- ③COC+「地域で学び地域で未来を拓く‘生き生きおかやま’人材育成事業」計画について

(2) 学生による取組み

- ①アデレイド・スタディツアー
- ②総社市インターンシップ
- ③AMDA 東日本大震災復興支援ボランティア
- ④チュッピー広場

2 内部質保証システムについて

- 大学の諸活動について点検・評価を行い、その結果を公表することで社会に対する説明責任を果たしているか
- 内部質保証に関するシステムを整備しているか
- 内部質保証システムを適切に機能させているか

3 大学評価ワークショップの振り返り

- 大学改革への活用について
- 社会への説明責任について
- 作業の妥当性について

※2 及び 3 は、公立大学政策・評価研究センターから依頼する項目

Ⅱ. 日程・プログラム

日時：平成 28 年 2 月 7 日（日）15：30～17：00／2 月 8 日（月）9：00～17：00

会場：岡山県立大学

（7 日）本部棟 2F 中会議室／（8 日）学部共通棟（北）8203 講義室

時間	プログラム	内容
2 月 7 日（日） 15：30～17：00 (90)	岡山県立大学 概要説明	大学の概要を説明 (内部質保証体制に関する説明を含む)

時間	プログラム	内容
2 月 8 日（月） 9：00～9：15 (15)	挨拶	
9：15～10：45 (90)	大学プレゼンテーション	①大学教育開発センターFD 研修事業 について ②岡山県立大学教育力向上支援事業 について ③COC+「地域で学び地域で未来を拓く ‘生き活きおかやま’ 人材育成事 業」計画について
10：45～12：00 (75)	学生プレゼンテーション	①アデレイド・スタディツアー ②総社市インターンシップ ③AMDA 東日本大震災復興支援ボラン ティア ④チュッピー広場
12：00～13：30 (90)	昼食、施設見学	
13：30～15：30 (120)	ディスカッション	大学プレゼンテーションに基づき意 見交換
15：30～15：45 (15)	休憩	
15：45～16：30 (45)	内部質保証システムにつ いて	大学概要説明に基づき意見交換
16：30～17：00 (30)	大学評価ワークショップ の振り返り	ワークショップの成果や課題等につ いて意見交換

Ⅲ. 参加者（※敬称略）

1. 岡山県立大学

（1）教員

No.	職 名	氏 名	備考
1	学長	辻 英明	評価委員会委員長
2	保健福祉学部長（保健福祉学研究科長）	高橋 吉孝	評価委員会委員
3	情報工学部長（情報系工学科研究科長）	尾崎 公一	評価委員会委員（認証評価部会）
4	デザイン学部長（デザイン学研究科長）	森下 眞行	評価委員会委員（認証評価部会）
5	看護学科長（看護学専攻長）	山口三重子	
6	栄養学科長（栄養学専攻長）	伊東 秀之	
7	保健福祉学科長（保健福祉学専攻長）	村社 卓	
8	保健福祉科学専攻長	高橋 吉孝（再掲）	
9	情報通信工学科長（電子情報通信工学専攻長）	伊藤 信之	
10	情報システム工学科長	有本 和民	
11	人間情報工学科長	佐藤洋一郎	
12	システム工学専攻長（博士前期）	榊原 勝己	
13	システム工学専攻長（博士後期）	尾崎 公一（再掲）	
14	デザイン工学科長（デザイン工学専攻長）	小野 英志	
15	造形デザイン学科長（造形デザイン学専攻長）	難波久美子	
16	学生部長	吉原 直彦	評価委員会副委員長（認証評価部会長）
17	附属図書館長	山下 広美	評価委員会委員
18	共通教育部長	末岡 浩治	評価委員会委員
19	教養教育推進室長	末岡 浩治（再掲）	
20	語学教育推進室長	末岡 浩治（再掲）	
21	情報教育推進室長	三谷 健一	
22	健康・スポーツ教育推進室長	高戸 仁郎	
23	社会連携教育推進室長	山本 浩史	
24	地域共同研究機構長	渡辺 富夫	評価委員会委員
25	産学官連携推進センター長	渡辺 富夫（再掲）	
26	保健福祉推進センター長	谷口 敏代	
27	認定看護師教育センター長	住吉 和子	
28	地域連携推進センター長	佐藤洋一郎（再掲）	
29	教育研究開発機構長	吉原 直彦（再掲）	

Ⅲ 大学評価ワークショップ（岡山県立大学）実施仕様書

30	大学教育開発センター長	田内 雅規	
31	国際交流センター長	阿部 淳二	
32	総合情報機構長	吉原 直彦 (再掲)	
33	情報基盤活用推進センター長	菊井玄一郎	
34	広報メディア開発センター長	嘉数 彰彦	
35	保健福祉学部教授	荻野 哲也	評価委員会委員
35	保健福祉学部教授	中村 光	評価委員会委員
36	情報工学部教授	磯崎 秀樹	評価委員会委員
37	情報工学部教授	濱田 泰一	評価委員会委員
38	デザイン学部教授	野宮 謙吾	評価委員会委員
39	デザイン学部教授	村木 克爾	評価委員会委員
40	保健福祉学部教授	久保田 恵	
41	学生支援室長	齋藤 誠二	
42	保健福祉学部教授	佐藤 和順	

(2) 事務局

No.	職 名	氏 名	備考
1	大学事務局長	徳田 浩一	評価委員会委員
2	大学事務局次長（総務課長）	田頭 博行	
3	教学課長	山上 弓人	
4	企画広報班長	小野 和之	
5	総務班長	福島 成明	
6	学部事務班長	原田 和典	
7	経理班長	奥井 洋一郎	
8	教務班長	清水 昌之	
9	学生支援班長	藤江 洋一	
10	附属図書館図書班長	片岡 秀人	

(3) 学生

No.	取組事業名	氏 名	所属	年次
1	アデレード・スタディツアー		保健福祉学部栄養学科	4年
2			保健福祉学部栄養学科	4年
3			保健福祉学部栄養学科	4年
4			保健福祉学部栄養学科	3年
5	総社市インターンシップ		保健福祉学部保健福祉学科	3年
6			情報工学部スポーツシステム工学科	3年
7			デザイン学部造形デザイン学科	3年
8	AMDA 東日本大震災復興ボランティア		保健福祉学部保健福祉学科	2年
9			保健福祉学部保健福祉学科	2年
10	チュッピー広場		保健福祉学部保健福祉学科	3年
11			保健福祉学部保健福祉学科	3年

2. 評価チーム

(1) 評価担当者（公立大学政策・評価研究センター） ※50音順

	氏名	役職
	浅田 尚紀	兵庫県立大学 副学長／前広島市立大学長 (本センター) センター長
主査	奥野 武俊	元公立大学協会会長／前大阪府立大学長
	佐々木 民夫	岩手県立大学 高等教育推進センター長 (本センター) 副センター長
	廣川 能嗣	滋賀県立大学 研究・評価担当理事・副学長 (本センター) 連携研究員
	藤井 保	県立広島大学 人間文化学部健康科学科・教授、学長補佐、業務評価室長、監査室長 (本センター) 連携研究員
	中田 晃	公立大学協会事務局長 (本センター) 専門委員

◆評価担当者の役割分担（※表中左の担当者がディスカッションの進行を担う。）

NO		プログラム	担当者	
1(1)	①	大学教育開発センターFD 研修事業について	浅田	藤井
	②	岡山県立大学教育力向上支援事業について	奥野	廣川
	③	COC+「地域で学び地域で未来を拓く‘生き生きおかやま’人材育成事業」計画について	佐々木	廣川
1(2)	①～④	学生プレゼンテーション	奥野	佐々木
2		内部質保証システムについて	佐々木	藤井
3		大学評価ワークショップの振り返り	浅田	中田

(2) 事務局スタッフ

杉浦 洋典

松浦 大輔（名桜大学研修生）

3. オブザーバー

文部科学省 大学振興課 君塚剛 課長補佐

岡山県 総務部総務学事課 真鍋紳一郎 参事

IV. その他

(1) 実施経費

- 試行期間につき、必要な経費の一部を実施手数料として設定します。
- 受審校参加者に係る経費は受審校の負担とします。
- 飲食等に係る経費は、各自の負担とします。
- 上記以外の経費については、協議の上負担について決定します。

(2) 準備資料

<岡山県立大学>

- プレゼンテーション資料

<公立大学政策・評価研究センター>

- 大学評価ワークショップ実施ハンドブック

IV 大学評価ワークショップ（岡山県立大学）実施の経緯

（１）実施仕様書の作成

平成 27 年 11 月 10 日、岡山県立大学から「大学評価ワークショップ」実施についての要望が提出された。センターはこの要望を受けて実施仕様書（案）を作成して大学に対して提示し、その後細部の調整を経て最終的に平成 28 年 1 月 6 日に実施仕様書を確定させた。

（２）大学評価ワークショップに関する打ち合わせを実施

平成 27 年 12 月 15 日、中田晃専門委員及び事務局スタッフが岡山県立大学を訪問し、学長、評価委員長、事務局長等に対し、「大学評価ワークショップ」の意義と事前に必要となる準備や当日の大きな流れなどの具体的な内容について説明を行った。

（３）「プレゼンテーション資料」及び「大学評価ワークショップ実施ハンドブック」の作成

岡山県立大学は当日使用する「プレゼンテーション資料」を作成し、センターに対して事前提供した。またセンターにおいては、岡山県立大学の公表済みの教育情報及び各種評価結果のうち主なものを整理し、「大学評価ワークショップ実施ハンドブック」を作成した。両資料は、当日大学側、評価チーム側双方に配布された。

（４）「大学評価ワークショップ（岡山県立大学）」の実施

平成 28 年 2 月 7 日及び 8 日、元公立大学協会会長の奥野武俊前大阪府立大学長を主査とする、評価チーム計 6 名が岡山県立大学を訪問し「大学評価ワークショップ（岡山県立大学）」を実施した。なお、このワークショップには、文部科学省から君塚剛大学振興課課長補佐が、岡山県立大学の設立団体である岡山県総務部総務学事課から真鍋紳一郎参事が、オブザーバーとして参加した。

（５）「大学評価ワークショップ（岡山県立大学）」評価チーム会議の実施

平成 28 年 2 月 23 日及び平成 28 年 3 月 16 日、評価チームが、大学ピアレビューを含む「大学評価ワークショップ（岡山県立大学）実施報告書」（本報告書）の内容について協議を行った。

（６）「大学ピアレビュー（岡山県立大学）」案の提示と受審大学からの意見聴取

平成 28 年 3 月 31 日、評価チーム内での協議等を経て作成した「大学ピアレビュー（岡山県立大学）」の案を岡山県立大学に送付し、意見の聴取を行った。

（７）「大学ピアレビュー（岡山県立大学）」の確定

平成 28 年 4 月 6 日、岡山県立大学の意見を踏まえ、「大学ピアレビュー（岡山県立大学）」を確定させ、岡山県立大学に送付すると同時にセンターホームページに掲載した。